

ハヴローシェチカ (ロシア)

昔^{むかし}むかし、あるところに、ハヴローシェチカという小さな女の子がいました。お父さんもお母さんもなくなつて、ひとりきりになつたので、ハヴローシェチカは、ある家にもらわれていました。

その家の主人^{しゅじん}とおかみさんには、ハヴローシェチカより大きな娘^{むすめ}が三人ありました。上の娘は目がひとつだったのでひとつ目とよばれていました。つぎの娘はふたつ目、下の娘は三つ目とよばれていました。娘たちは三人とも一日じゅう何もしないで遊^{あそ}んでばかりいました。ところが、ハヴローシェチカは、毎日、そうじをしたり、ご飯^{はん}を作ったりして、くたくたになるまで働^{はたら}かされました。おまけに、娘たちのために針仕事^{はりしごと}をしたり、糸をつむいだり布^{ぬの}を織^おったりしなければなりませんでした。それなのに、おかみさんも娘たちも、ハヴローシェチカにやさしい言葉^{ことば}をかけるどころか、たたいたりつねったりしていじめました。

ある日のこと、ハヴローシェチカは、牛の世話^{せわ}をするために野原へ出かけていきました。そして、一頭のまだらの雌牛^{めうし}を抱^だいていました。

「ああ、雌牛さん。わたし、みんなにたたかれたりしかられたりするばかりで、パンもろくにももらえないし、泣^なくこともゆるしてもらえないの。それに、あしたまでに、五^{*}プードの糸をつむいで布に織りあげ、白くさらしてつや出しするようにといわれたの」すると、まだらの雌牛はいいました。

「きれいな娘さん。わたしの耳の中にもぐりこんで、もうかたほうの耳からはいだしてごらん。そのあいだに、仕事はすっかりかたづいているよ」

ハヴローシェチカは、いわれたとおり、雌牛の耳の中にもぐりこんで、もうかたほうの耳からはいだしました。すると、糸つむぎも布織りもさらしもつや出しも、すっかり仕上^{しあ}がっていました。

ハヴローシェチカが、布をおかみさんの所^{ところ}に持^もっていくと、おかみさんは美^{うつく}しい布を見て、大喜^{おおよろこ}びで衣装箱^{いしやうば}にしまいました。そして、ハヴローシェチカに、もっとたくさんの布を織^おってくるようにいいつけました。

ハヴローシェチカはもういちど野原に出かけて行って、雌牛の耳の中にもぐりこみ、もうかたほうの耳からはいでした。そして、できあがった布を持ってかえり、おかみさんにわたしました。おかみさんは、ハヴローシェチカがどうやってこんなにたくさんの美しい布を織れるのか、ふしぎでなりませんでした。

そこで、つぎの日、おかみさんは、上の娘のひとつ目をよんでいいました。

「かわいい娘や、ハヴローシェチカといっしょに野原へ行っておいで。そして、だれがあなたの子を手伝^{てっだ}って、つむいだり布を織ったりさらしたりしているのか、見てきておくれ」

ひとつ目は、ハヴローシェチカといっしょに野原へ出かけていきました。けれども、母親のいいつけをすっかりわすれて、草の上に寝^ねころがってひなたぼっこを始めました。それを見て、ハヴローシェチカは歌いました。

ねんねんころり　ひとつの目

ねんねんころり　ひとつの目

すると、ひとつ目はぐっすり寝^{ねい}入ってしまいました。ハヴローシェチカは、ひとつ目がねむっているあいだに、雌牛の耳の中にもぐりこみ、もうかたほうの耳からはいでした。布はすっかりできあがっていました。

夕方、ふたりは家にもどりましたが、ひとつ目は、だれがハヴローシェチカを手伝っていいのか、おかみさんに教えることができませんでした。

そこで、つぎの日、おかみさんは、ふたつ目をよんでいいました。

「かわいい娘や、だれがあの子を手伝って、つむいだり布を織ったりさらしたりしているのか、こんどはおまえが見てきておくれ」

野原に着くと、ふたつ目も、草の上に寝^ねころがってひなたぼっこを始めました。ハヴローシェチカは、歌いました。

ねんねんころり　ひとつの目

ねんねんころり　もうひとつ

そして、ふたつ目がぐつすり寝入っているあいだに、ハヴローシェチカは、雌牛の耳の中にもぐりこみ、もうかたほうの耳からはいだしました。布はすっかりできあがっていました。

おかみさんは、腹を立てました。そして、つぎの日もつとたくさんの布を織るようにハヴローシェチカにいつけました。それから、こんどは三つ目をよんでいいました。

「かわいい娘や、だれがあの子を手伝って、つむいだり布を織ったりさらしたりしているのか、見てきておくれ」

三つ目は、野原でぴよんぴよんはねまわって遊んでいましたが、そのうちに、草の上に寝ころがってひなたぼっこを始めました。ハヴローシェチカは、歌いました。

ねんねんころり　ひとつの目

ねんねんころり　もうひとつ

ところが、ハヴローシェチカは、三つ目の目のことをわすれていました。それで、ふたつの目はねむりましたが、三つ目の目は開いていて、ハヴローシェチカが雌牛の耳の中にもぐりこみ、もうかたほうの耳からはいだして、できあがった布を取りあげるのを、すっかり見ていました。三つ目は家に帰ると、野原で見たことを残らずおかみさんに話しました。

おかみさんは、それを聞くと、夫にいいました。

「まだらの雌牛を殺しておくれ」

夫はおどろいて、

「とんでもない。あの雌牛はまだ若くていい牛だ」といって、ことわりました。けれども、おかみさんがしつこく殺してくれとたのむので、とうとう夫はしょうちして、ナイフを研ぎはじめました。

ハヴローシェチカは、雌牛の所へとんでいいいました。

「だんなさんがあんたを殺そうとしているわ」

すると、雌牛はいいました。

「きれいな娘さん。わたしが殺されたら、あんたはわたしの肉を食べてはいけないよ。わたしの骨を拾ってハンカチに包み、庭にうめなさい。そして、わたしのことをけっしてわ

すれないで、骨をうめた所に毎朝水をかけておくれ」

雌牛が殺されてしまうと、ハヴローシエチカは、雌牛にいわれたとおりにしました。肉はけっして食べないで、骨をハンカチに包んで庭にうめ、毎朝わすれずに水をかけました。すると、骨をうめたところから、りんごの木が生えてきました。木はたちまち大きくなりました。金の葉がしげつてさらさらと鳴り、銀の枝が重くたれ、よくうれた実がたわわに実りました。あまりのふしぎさに、馬に乗って通りかかる人は馬を止め、歩いている人は立ち止まり、だれもかれもが美しい木に見とれました。

ある日のこと、りっぱな身なりをした貴族の若者がそこを通りかかりました。そして、すばらしいりんごの木を見て、庭にいた三人の娘たちに話しかけました。

「だれか、あのりんごをひとつわたしに取ってくれませんか。りんごを取ってくれた人をわたしの妻にむかえましょう」

娘たちはわれ先（さき）にりんごを取ろうとしました。ところが、娘たちが手をのばすと、木の枝がずんずん高くのびて、りんごはずっと高くまで上がってしまいました。棒（ぼう）でりんごをたたき落とそうとすると、葉っぱが目（め）にささるし、とびあがってもぎ取ろうとすると、かみの毛が枝に引っかかります。どんなにがんばってもひとつも取ることができません。

そこへ、ハヴローシエチカが出てきました。ハヴローシエチカがりんごの木に近づくと、枝はひとりでにたれて、りんごが下りてきました。ハヴローシエチカは、りんごをひとつもいで若者にわたしました。

こうして、ハヴローシエチカは、その若者と結婚（けっこん）して、いつまでも幸せ（しあわせ）に暮（く）らしました。

* プード ロシアの重量（じゅうりょう）の単位（たんい）。一プードは一六・三八〇キログラム。五プードで八一・

九キログラム

* 貴族 身分（みぶん）や家（いへ）がらの高い人（ひと）。